

「星亨とシェイクスピア—シェイクスピア受容の側面」（『武蔵野学院大学大学院研究紀要』第17輯、武蔵野学院大学、令和6年3月）、1-14頁

「プロローグ」「1 星亨」「2 『海外万国偉績叢伝』」「3 星の読書好き」「4 星亨と自由民権運動、そして『ジュリアス・シーザー』の翻訳」「エピローグ」の順で論じた。実際にはシェイクスピアを取り上げた第7巻の『海外万国偉績叢伝』は出版されなかったが、その背景と明治時代のシェイクスピア受容の側面として捉えた。結論として「間接的な理由から星が1901年に亡くなってからむしろ注目を浴びるようになったと言った方がよいかもしれない。1901年6月21日に東京市庁参事会室内で刺殺されたが、1901年7月14日には伊井蓉峰一座（明治座）による『該撒奇談』、同年9月にも福井茂兵衛一座（大阪角座）が上演された。これは日本における『ジュリアス・シーザー』の上演の最初とも言われている。これ以前にも板垣退助が演説中に刺されたのは1882年であり、1883年には河島敬蔵『欧州戯曲ジュリアス、シーザルの劇』（『日本立憲政党新聞』で連載）、1884年には坪内逍遙により『該撒奇談 自由太刀餘波鋭鋒』（東洋館）が出版された。自由民権運動と『ジュリアス・シーザー』が持つ劇中の事件等が、欧米化する日本の姿との重なりを見て取ったということにあるのだ。」とした。（B5）